

**St. Luke's College of Nursing
RCDNP Annual Report 2012**

2012年度聖路加看護大学

看護実践開発研究センター報告書





CONTENTS

■ 看護実践開発研究センターとは	3
■ センター長・各部門長挨拶	4～5
■ きぼうときずな 福島県災害支援プロジェクト	6
■ PCC 実践開発部門	7～15

ナースクリニック

1. 聖路加健康ナビスポット るかなび	8
2. 赤ちゃんがやってくる	8
3. ルカ子母乳育児相談	8
4. 天使の保護者ルカの会	9
5. 天使の保護者ルカの会；グリーフカウンセリング	9
6. 乳がん女性のためのサポートプログラム	9
7. 子どもの健康、知ろう、考えようー子どもの健康を家族と考える学習・交流会ー	10
8. リンパ浮腫ケアステーション	10
9. 多世代交流型 デイプログラム 聖路加 ^{なご} 和みの会	10
10. 転倒骨折予防実践講座	11
11. 認知症の人のご家族のためのリフレッシュプログラム	11
12. 在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング	12
13. 高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳」 ^{メモリーブック} 作りプロジェクト	12
14. ダウン症候群のよりよい養育環境検討会 ー中央区ー	13

市民健康講座

1. はじめの一步の会	13
2. 「自分の体を知ろう」おはなし会	14
3. 聖路加市民アカデミー	14
4. 新健康カレッジセミナー	14
5. 中央区民カレッジ まなびのコース	15
6. 中央区民カレッジ シニアコース	15



●
■ **キャリア開発支援部門** 16 ~ 22

ナーススキルアップ

1. 看護管理コンサルテーション 17
2. 緩和ケアコンサルテーション 17
3. 在宅看護コンサルテーション 17
4. 看護研究コンサルテーション 17
5. 語り合おう！看護マネジメント —看護管理者のための‘サポートグループ’— 17
6. 退院調整看護師養成プログラムと活動支援 17
7. 精神看護事例検討会 18
8. がん看護事例検討会 18
9. 英文献を読もう！パートⅠ ～基礎編～ 19
10. 英文献を読もう！パートⅡ ～構文理解強化コース～ 19
11. 不妊症看護認定看護師ポストコース 19
12. がん化学療法看護認定看護師 スキルアップセミナー 19
13. 訪問看護スキルアップセミナー 20
14. 実践・在宅ケア入門 ～全ての対象者に緩和ケアを～ 20
15. 看護管理塾 20
16. ELNEC-J 聖路加 ～すべてのナースのためのエンド・オブ・ライフ・ケア～ 21
17. 文献検索～準備体操 21
18. クリティカルケア・シミュレーション教育プログラム SCC 21

認定看護管理者ファーストレベル講習 22

認定看護師教育課程 不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース 22

■ **研究活動支援部門** 23

研究相談 23

臨床疫学研究入門 23

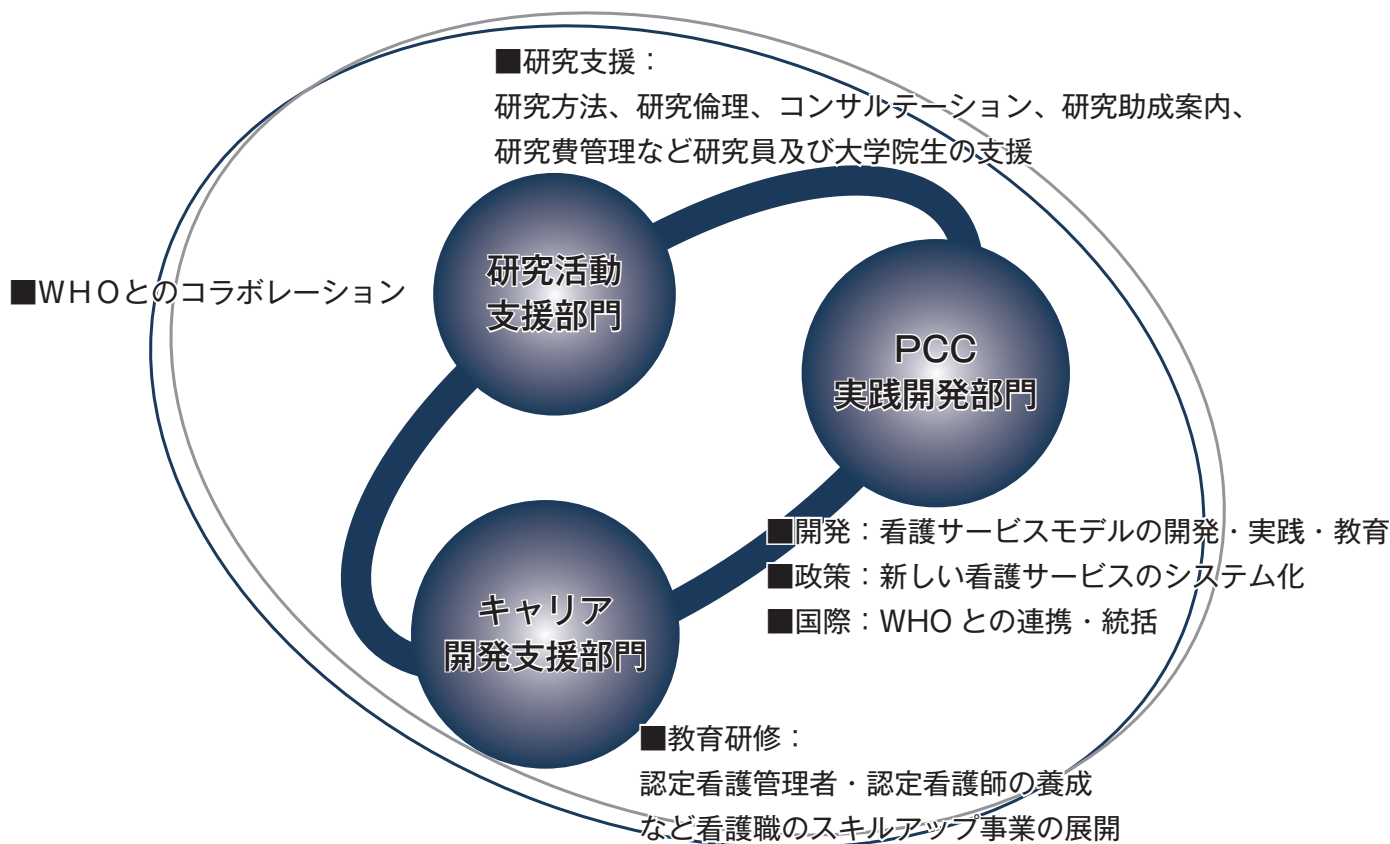
■ **2012年度教育・研修におけるセンターの活用状況** 24

■ **2012年度看護実践開発研究センター 運営委員会・専任研究員・支援室スタッフ** 24

看護実践開発研究センターとは

少子高齢社会で生じている健康問題や社会の動向を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護の提供方法を開発・研究することを目的とし、開設されました。また、国際的な活動の基軸として、WHO コラボレーティングセンターとしても機能しています。センター長のリーダーシップのもとに、「People Centered Care (PCC) 実践開発」「キャリア開発支援」「活動支援」の3つの部門が機能しています。「PCC 実践開発」では、さまざまな健康課題をお持ちの個人や家族あるいは地域（集団）に対して、新たな看護を開発することを目的に、市民の皆様とともに協働し研究を推進します。「キャリア開発支援」は医療現場で活躍している看護職を対象に、より良い実践を目指した教育を行っています。「研究活動支援」は、研究センターで実践、研究、教育に携わる教員や学生たちが、よりよく活動できるためのさまざまな支援を行っています。

おもに、看護実践開発に関わる研究と、その支援体制の確立、国際的・学際的な交流事業、市民・専門職に対する生涯学習事業、看護サービスのモデルとなる実践の場の提供などの事業を行います。また、これらの研究事業をつなぎ、成果を蓄積し、臨床の場に提供できるようなデータベースを開発していきます。



センター長挨拶

看護実践開発研究センター センター長 山田 雅子

聖路加看護大学看護実践開発研究センターは、医療者中心ではなく、本当の意味での人々を中心とした看護のあり方を模索しています。超高齢社会の中で、膨れ上がる医療ニーズに医療者だけでは対応不可能であるからです。病を持ちながらも上手に生きていくこと、生活が不自由になっても尊厳を保ちながら生きていくことについて、当事者やその周りにいる人々が智恵を得たり支えあったりすることで主体的にいることができるよう、看護職として何ができるのかということが大きな研究テーマです。

研究センターの活動は、研修会等の参加費と貴重な寄付によって支えていただいております。テルモ株式会社、日本財団、メルクセローノ株式会社、パラマウントベッド株式会社、そして延べ5,000名を越す、研究センター事業参加者の皆様からのご支援とご協力に心から感謝申し上げます。

研究センターに来ると、逼迫した社会情勢の中でも何か解決の糸口が見つかるようだと感じていただけるような活動を今後とも展開してまいりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



PCC 実践開発部門

PCC 実践開発部門長 亀井 智子

PCC (People-centered care) 実践開発部門は「ケアを受ける人々を中心とした看護の開発」を主軸において、地域で生活する多様な世代にある多様な健康課題をもつ人をその対象として、看護の実践の開発をすすめています。

各実践開発事業で対象とした市民とその健康課題は、妊娠中の女性とその家族、授乳育児中の母子、周産期に赤ちゃんをなくされた家族、乳幼児や子どもをもつ家族、女性特有の疾患に関心をもっている方、乳がんをもつ女性、認知症高齢者の介護を行う家族、認知症をもつ高齢者、転倒予防に関心のある高齢者、慢性呼吸不全をもつ高齢者、小中学生、ボランティア、健康について学習したい地域住民の方々等で、それぞれ専門性の高いものでした。これらはユニークな名称のもと、下記の19のPCC 実践開発研究事業として展開され、年間計3,949名の市民のご参加・ご利用をいただきました。

また、この部門に属する研究事業全体としての質の管理を「構造 - 実践過程 - 成果」の各要因から評価・分析し、実践の質をさらに向上するため、部門ミーティングを行い、各事業の内容や課題、および様々な対象者に安全に事業を展開するための方法について話し合いました。今後も本学研究者と市民の皆様との協働により、市民主導による看護実践のあり方を研究開発していきたいと考えおります。



2012 年度 PCC 実践開発部門研究事業名

- 赤ちゃんがやってくる ■ルカ子母乳育児相談
- 天使の保護者ルカの会 ■天使の保護者ルカの会；グリーンカウンセリング
- 乳がん女性のためのサポートプログラム ■リンパ浮腫ケアステーション
- 子どもの健康、知ろう、考えよう「子どもの健康を家族と考える学習・交流会」
- 「自分のからだを知ろう」おはなし会 ■ダウン症候群のよりよい養育環境検討会 - 中央区
- 高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳（メモリーブック）」作りプロジェクト
- 多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会 ■転倒骨折予防実践講座
- 保護者・支援者のための予防接種講座 ■家で死ねるまちづくり はじめの一步の会
- 在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング ■認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム
- 聖路加健康ナビスポットるかなび
- 聖路加市民アカデミー ■新健康カレッジセミナー

キャリア開発支援部門

キャリア開発支援部門長 森 明子

キャリア開発支援部門は、看護師、保健師、助産師がより良い実践を行うために看護職者としての資質及び実践力の向上を支援することを目的とした部門です。2012年度は、〈ナーススキルアップ講座〉を通じ20事業を展開しました。

認定教育課程として「認定看護管理者ファーストレベル講習」「不妊症看護」「がん化学療法看護」「訪問看護」の4コースを開講し、141名の修了生を輩出しました。

加えて、従来からのコンサルテーション（看護管理、緩和ケア、在宅看護、看護研究）、看護管理者支援プログラム、退院調整看護師養成プログラム、事例検討会（精神看護、がん看護）、看護英語文献読解クラス（基礎編、構文理解強化）、不妊症看護あるいは訪問看護、がん看護の認定看護師を対象としたスキルアップセミナー、在宅での緩和ケアを促進する「実践・在宅ケア入門」のほか、新規にパラマウントベッド株式会社との共同事業として「クリティカルケア・シュミレーション教育プログラム」や「エンド・オブ・ライフ・ケアを学ぶ「ELNEC-J 聖路加」、「臨床疫学研究入門」講座を開講し、総計681名（のべ人数）もの多くの方が参加されました。これからも看護実践の質の向上をもって人々への福利へ貢献することをめざして看護専門職者の自己研鑽プログラムを開発し、提供していく所存です。



研究活動支援部門

研究活動支援部門長 有森 直子

当部門の役割・職務は、市民の健康生活の向上に資する看護の実践開発を促進するため、本学の教員ならびに研究員、大学院生の研究活動を支援することにあります。2012年度の活動は（1）研究助成金情報の提供（27件）（2）文部科学省及び厚生労働省の科学研究費の申請及び経理等手続きの支援（68件）（3）研究員及び大学院生に対する研究コンサルテーション（37件）（4）研究員及び大学院生に対する研究倫理コンサルテーション（0件）（5）研究助成に関する選考委員会規程の策定と審査手順に基づいた選考（1件）でした。また、科学研究費の交付は、文部科研：本年度交付48件+23年度繰越4件+他機関分担分10件=62件、厚生科研：6件；計68件。文部科研採択率：新規・継続分96%（新規採択率89%）と、文部科研においては、日本で最も高い採択率をあげることができました。

今後の課題として、（1）科研費申請経理業務の効率化、（3）研究コンサルテーション、研究倫理コンサルテーションにおける研究科委員会および研究倫理委員会との役割分担の明確化を諮りたいと思います。

現状における優れた研究活動を支える「研究環境（ハード面・ソフト面）」をより充実することが、求められています。





きぼうときずな 福島県災害支援プロジェクト

■「福島県災害支援プロジェクト」(PCC 実践開発部門)

事業主：山田 雅子 開催日：2012年4月1日～2013年3月31日 参加人数：425名

2011年4月に発足したきぼうときずなプロジェクトは、2012年度に入り、NPO法人日本臨床研究支援ユニットといわき市、富岡町との間で交わされた業務委託契約をもとに、支援活動を継続した。

いわき市では市の行政保健師の指示のもと、要継続支援ケースの訪問に加え、仮設住宅・借上住宅・県特例住宅に避難している住民の2年度目の全戸訪問を実施した。訪問世帯は3,396件（訪問回数3,762回）、派遣した保健師・看護師は延べ425人、本学の呼びかけによるボランティア参加者は72人であった。また避難住民の健康状況を把握するための健康調査を実施、1733件の調査データが収集された。本学では、大和証券ヘルス財団からの研究助成金を受け、2012年度に収集された健康調査データの集計・分析を2013年度に行う予定。

富岡町への支援活動は、郡山市内に行政機能を移転している富岡町の行政保健師の指示のもと、郡山市内に非難している富岡町民へ実施された。5月と6月には株式会社岩城のかあさんの協力を得て、おかず箱プロジェクトを実施した。岩城のかあさんから、商品である、1食分のおかずの真空パックが50種類入ったおかず箱の提供をうけ、50世帯に配布、アンケートを実施した。アンケートの結果を集計し、富岡町の健康づくり対策へ役立てた。また2012年10月から2013年3月まで土日の訪問活動を実施し、延べ19人の保健師・看護師を派遣、44世帯を訪問した。

2013年度も引き続き、いわき市、富岡町との業務委託契約を交わし、きぼうときずなの支援活動を継続して行く予定である。



PCC 実践開発部門



【ナースクリニック】

■「るかなび」

事業主：山田 雅子 開催日：8月・年末年始・年度末を除く月～金 10～16時 参加人数：1063名

るかなびの事業は、研究センターの基幹事業であり、聖路加・テルモ共同研究事業の一環とした活動である。2012年度は、るかなびボランティア54名（市民ボランティア32名、専門職ボランティア22名）と、運営会議メンバー9名（コーディネーター3名、司書1名、看護系教員4名、事務1名）で運用した。

一般市民向けには、健康相談・健康測定（骨密度・体脂肪・血圧）を207日／年、開催し721名利用者した。また、ランチタイムミニ講座・ミニコンサート10回開催し342名の来訪者があった。さらに、CHADO（ティーサロン）11回開催し、中央区健康福祉祭りへの参加、白楊祭へのバザー参加を行った。また、大学図書館の分室機能を持ち、闘病記・パンフレット類、図書の利用、インターネット検索の場を提供した。るかなびボランティア向けには、ボランティアミーティング5回、るかなび全体会2回、ボランティア勉強会4回、闘病記ブックリストミーティング8回の活動を行った。

教育の場としては、学部1年生・学士16回生のPCC概論で延べ計97名、認定看護師教育課程訪問コース研修生の実習で16名を受け入れた。また、るかなび闘病記文庫の利用で学部生、院生等に286冊を貸し出した。また、専門看護師である看護系教員に実践活動の場として提供した。研究活動としては、骨粗鬆症予防の教材における活用評価と市民健康相談での対応をした看護職の体験に関する調査研究を行った。今年度は8年間のるかなびの活動を論文にまとめ、その結果、①PCCの実現、②アカデミック・ナーシング・プラクティスへの挑戦、③図書館機能としての挑戦、④継続的発展のしくみ作りへの課題が明らかになった。

<今年度研究業績>

- ・高橋恵子、山田雅子、菱沼典子他（2013）. 看護大学が開設している市民のための聖路加健康ナビスポット「るかなび」の活動評価，聖路加看護大学紀要，39，47－55.
- ・Keiko Takahashi, Michiko Hishinuma etc (2012) .Academic Nursing Practice at St. Luke' s College of Nursing in Japan; Community "Walk-In Health navigation" Offered on Campas,The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery,77.
- ・佐藤直子，高橋恵子，菱沼典子，市民向け健康講座&コンサートの評価－聖路加看護大学での初回参加者のアンケート結果から－，第17回聖路加看護学会学術大会，43.

■「赤ちゃんがやってくる」

事業主：片岡 弥恵子 開催日：6回／年 参加人数：53家族（155名）

「あかちゃんがやってくる」は、新しく子どもが生まれる家族、特に兄姉になる子どもたちに対して、「あかちゃんが生まれるってどういうこと？」「なぜ、あかちゃんが生まれるの？」「あかちゃんとは？」などについて学習し、新しく家族を迎えるための準備クラスである。兄姉になる子どもたちが、新しい生命の誕生を通じて、自分の生・性を大切にすることができるよう働きかけると同時に、母親や父親が、今後子どもたちと性に関する話ができるきっかけとなっている。

■「ルカ子母乳育児相談室」

事業主：堀内 成子 開催日：来所；月・水 訪問；随時（76名）

本年度はスタッフが減ったこともあり、訪問による相談が多くなった。訪問での相談を行っている施設は少ないこともあり、特に授乳や出産後の生活のペースが安定するまでの産後間もない時期の訪問による相談のニーズは根強いと感じている。対象は、やはり産後の退院後から1ヶ月健診前後が最も多く、訪問先は中央区をはじめ、近隣の江東区、港区、台東区であった。相談内容は、母乳不足感（それに伴うミルクの追加量のご相談）、乳頭や乳房の痛みなどのトラブル、子どもが思ったほど寝てくれないことにまつわる悩みが多かった。

聖路加産科クリニックでの相談を開始して3年目に入り、聖路加産科クリニックとのスタッフとの交流もあり、聖路加産科クリニックからの紹介で、相談を受けることもあった。また、待ち時間には母親同士が話している姿も見受けられた。

e-mail のみでの予約と対応をしていることから、急な対応は難しいが、来年度は訪問での相談をより充実させていきたいと考えている。

■「天使の保護者ルカの会」

事業主：堀内 成子 開催日：9回/年 参加人数：74名

2012年度は、計9回のセルフヘルプ・ミーティング、及び株式会社テルモからの資金援助により、手作りの会のイベントを2回開催した。

この会を始めて9年になるが、参加者の話から、死別の前後に病院で受けているケアがよくなっていることが感じられる。セルフヘルプ・ミーティングでは、病院でのケアに対する不満等はあまり聞かれなくなり、純粹に子どもを亡くした悲しみが語られることが多い。しかし、子どもを亡くした両親が病院と関わりをもつ時間は限られており、自分の居住する地域で、家族やその他の社会の人に囲まれて過ごす時間が圧倒的に長い。そして、未だ社会的に周産期の喪失の悲しみの深さは十分認知されておらず、家庭に戻った後に両親は辛い思いをしている。その辛さがミーティングではよく語られる。

そこで、今年度より保健所にもパンフレットの配布を始めた。その結果、まだ数は少ないものの、保健所からの紹介による両親の参加や、保健所からの問い合わせがあった。潜在的なニーズはあると考え、次年度も保健所にパンフレットを配布し、この会の存在意義を保健師にも伝えていきたいと考えている。

また、この会は専門職と体験者が協働で運営する会である。これまでセンターや大学作成の、専門職側から発信するHPで広報を行っていたが、今年度よりスタッフブログを立ち上げ、体験者スタッフの立場からもこの会の活動を紹介し始めている。

■「天使の保護者ルカの会；グリーフカウンセリング」

事業主：堀内 成子 開催日：毎週水曜日 参加人数：17名

利用者（相談者）は、すべて女性（母親）であった。前年度からの継続相談が1例、本年度中に複数回相談のあったものが4例と、継続利用が増えている。

初回の来談時期は、喪失体験から3か月以内が多く、なかには2週以内という直後のケースもあり、体験から来談までの時間が短期化しており、「これから中絶を予定」というケースもあった。

相談に至る経緯（経路）では、ルカの会のグループ・ミーティングでの紹介や、自らインターネットでHPを検索しての例が多い。その他、かつて相談を利用した知人や体験者から紹介・推薦されたという事例やセンターから配布されたパンフレットを保健所で見かけて、カウンセリングの存在を知ったという事例もあった

相談内容は、こどもとの死別だけでなく、死別喪失をめぐる対人（夫婦や隣人）関係、次の妊娠への想い、繰り返された流産、心身の不安、子育て（上の子）ストレスなど幅広い。家族や周囲の理解や支援を得ている例が多いが、それでもなお、心身の不安定さ、漠然とした深い悲しみが続くことにより、来談に至っている。医療施設への不満などは、以前に比して少なく、むしろ「よいケアを受けました」という感想が寄せられることがある。

■「乳がん女性のためのサポートプログラム」

事業主：大坂 和可子 開催日：9回/年 参加人数：323名

2012年度は、7回の小グループでの話し合いと2回の学習会、合わせて9回のサポートプログラムを開催した。体験を分かち合う話し合いでは、同世代の悩み、診断後間もない時期または治療が落ち着いた時期の悩み、個々の治療内容に関連した副作用対策や悩みなど、様々なテーマを設けた。学習会は、乳がん認定看護師の高橋由美子氏（国立がんセンター中央病院）による「リンパ浮腫予防とセルフドレナージ」（講義に加え普段の生活の中でできるセルフドレナージの方法を小グループで実践的に学べるよう企画）と、林 直輝医師（聖路加国際病院乳腺外科）による「乳がんと骨粗しょう症」（骨粗しょう症を予防するためのライフスタイルの工夫（食事や運動）を、骨の働きや乳がんの治療と骨粗しょう症と共に関連づけて学べる講義）を開催した。長く参加するメンバーの中には、自主的に先輩体験者としてサポートプログラムに参加するものもあり、新しい参加者が参加しやすい雰囲気づくりをした。

サポートプログラム参加者のコアメンバーから出されたアイディアによりサポートプログラムの出張的役割を果たす「聖路加スマイルコミュニティ」を立ち上げ、2008年より体験者がボランティアとしてピアサポート活動を実施している。2011年10月より聖路加国際病院プレストセンタースタッフの協力のもと病院内に活動場所を移

行した活動が今年度は軌道にのり、自主的な運営を目指し体験者ボランティアボランティア組織が形成され院内でのピアサポートの質向上に向けてミーティングを行ったりブラッシュアップ研修を行った。

＜今年度研究業績＞

学会発表：大坂和可子、金井久子、玉橋容子、大畑美里、矢ヶ崎 香、小松浩子、病院内での乳がん体験者ボランティアによるピアサポート活動の課題、第27回日本がん看護学会、2013年2月16日～17日、金沢市にて開催。

■「子どもの健康、知ろう、考えよう」

事業主：及川 郁子 開催日：5回/年 参加人数：175名

2012年度は5回実施した。テーマは、6月「虫歯のない歯でおいしく食べよう ～正しく食べてすくすく育つために～」、7月「子どもの事故と応急処置・心肺蘇生法」演習付き、9月「子どものアレルギーについて」、11月「子どもにかかりやすい病気と薬・予防接種」、2月「子どもの関わりのコツ」である。子どもたちの健康問題や季節に合わせ、専門の講師を招いて講義を60分～90分程度行い、その後参加者との質疑応答を通しての交流を図っている。ここ数年、家族の希望もあり、内容が一定化してきている。

参加者は中央区在住・在勤である。夕方の2時間であるが、託児を行っていることもあり、親子の参加、リピーターが増えてきている。参加者の意見交換は活発であり、さながら親の相談会のような雰囲気になることもある。子育て中の親の参加が多いことから、育児に悩んだり、困ったりしていることも伺え、育児不安解消の一端を担っているともいえる。

また、保育園保育士も多く、日頃の子どもたちの関わり、健康管理について最新の情報を得たいというニーズがあることがわかる。

参加者のアンケートからは、学習内容のわかりやすさ、講師や参加者が身近に話せて堅苦しくないこと、運営や全体の雰囲気がよいことなど、肯定的評価が挙げられている。

回数を重ねるごとに託児利用の希望が増えて、断っている状況である。多くの参加者の要望に応えたいが、リスク管理等の問題もあり、引き続き検討課題である。

■「リンパ浮腫ケアステーション」

事業主：大畑 美里 開催日：毎週火曜日 参加人数：211名

本ステーションでは、リンパ浮腫を持つがん体験者を対象に、後藤学園と協力体制を組み、個別指導としてリンパドレナージ等専門的ケアの提供や、利用者がケアを継続できるようにセルフケア指導を行っている。また、乳がん術後で症状が軽症もしくは、リンパ浮腫の予防が必要な方を対象に、リンパ浮腫予防や早期発見のためのセルフケアグループ指導を行い、個別相談にはのべ人数165名、グループ指導には41名が利用された。8月には、リンパ浮腫ケアに関する基礎知識とセルフケア指導に関する研修会を行い、病院勤務の看護師ほか、コメディカルスタッフ、訪問看護ステーション看護師など29名の参加があった。参加者からは「とてもわかりやすい内容で日頃のアに取り入れられそうだ」との意見が聞かれ、有意義な会となった。

大学の担当者の看護師2名は、昨年度日本医療リンパドレナージ協会主催が認可する中級セラピスト資格を取得しており、今年度の取り組みとして積極的に施術に参加し、ケアステーションにおける専門的ケアの質の向上に努めた。

さらに、本学大学院修士課程がん看護・緩和ケア上級実践コースの演習の受け入れ、一般市民を対象にしたリンパ浮腫予防のためのセルフケアに関する講義を行うなど、看護師教育、市民へのリンパ浮腫に関する知識の普及をめざし活動を行った。

■「多世代交流型デイプログラム 聖路加 和みの会」

事業主：亀井 智子 開催日：毎週金曜日計27回開催 参加人数：のべ514名

2007年4月に本プログラムを創設し、5年間が経過した。PCCによる高齢者と子どもを中心とした世代間交流プログラムを週1回継続的に運営した。

登録高齢者は13名、小学生は6名である。また運営には地域ボランティア6名の協力を得た。プログラムに参加した高齢者への効果は、特に初回参加時にうつ傾向のある高齢者のうつの軽減、および穏やかな表情への変化、独居高齢者の外出先となること、認知症高齢者と他者・他世代との交流による会話の質の向上などであった。小学生は

高齢者との交流による気遣いが観察され、参加満足度（0～10のVAS）は高齢者9.5、子ども8.5といずれも高かった。

＜今年度研究業績＞

- ・糸井和佳、亀井智子、田高悦子他（2012）. 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果 - 文献レビュー - (2012) . 日本地域看護学会誌、15（1）、33-43.
- ・Tomoko Kamei, Yuko Yamamoto and Fumiko Kajii : Changes in the depression status of elderly following participation in an intergenerational day program over two years in a Japanese Urban Community (2012) , The 9th international conference of the global network of WHO collaborating centers, 68, Kobe.
- ・亀井智子、山本由子、梶井文子：聖路加式世代間交流観察（SIERO）インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討、聖路加看護学会誌，査読中．

■「転倒骨折予防実践講座」

事業主：亀井 智子 開催日：6回／年 参加人数：165名

第1回：問診、心身の計測（BMI、開眼片足立ち時間、骨密度、大腿周囲計長、10m歩行時間、QOL26）、転倒リスクアセスメント、小講義「高齢者の転倒の疫学」、運動プログラム、茶話

第2回：問診、小講義「高齢者の食事と栄養」、運動プログラム、茶話

第3回：問診、小講義「自宅の安全対策」運動プログラム、茶話

第4回：問診、小講義「足の手入れ」、運動プログラム、修了証授与

第5回（12週後フォローアップ）：問診、心身の計測、運動プログラム、教材の活用状況グループ討議、茶話

第6回（54週後フォローアップ）：問診、心身の計測、運動プログラム、教材の活用状況グループ討議、茶話

今年度の参加登録者は計34名で、午前コース18名、午後コース16名となった。第5回までの全講座参加者数は各12名であった。初回参加時点の1年以内転倒経験者数は、介入群5名（27.8%）、対照群は2名（12.5%）で、コースにより参加者特性に差異が認められた。12週間の追跡期間中の転倒者数は午前コース2名（11.1%）、午後コース1名（6.3%）であったが、本事業は3年間継続する計画であるため、これは初年度の参考値である。小講義への満足者割合は、「良かった」が両コースとも97～99%を占め、運動プログラムの強度は、「軽い」27～39%、「適当」59～63%、「強い」3～9%であった。講座全体の満足度（0～10のVAS）は午前コース9.6、午後コース9.3と高かった。

＜今年度研究業績＞

- ・亀井智子（2013）. 高齢者への自宅の安全対策の教育とその効果，リハビリナース，6（3）.
- ・杉本知子（2013）. 転倒・転落の個別リスク分析と安全な環境づくり，高齢者安心安全ケア 実践と記録，10（4）
- ・亀井智子（2012）. 在宅高齢者の転倒予防を目的とした Home Hazard Modification Program の開発とその効果，転倒予防研究会第9回研究集会シンポジウム「地域包括ケアシステムにおける転倒予防」，2012年10月7日，東京大学伊藤国際学術センター（東京都）.
- ・亀井智子（2012）. 家の中で転倒？ 寝たきりを防ぐための転倒予防自宅の中の安全対策，聖路加テルモ共同事業新健康カレッジセミナー2012，2012年11月10日，聖路加看護大学看護実践開発研究センター（東京都）.
- ・杉本知子（2012）. 老化を防ぐ：毎日の生活の中で心がけたいこと，平成24年度千葉県立保健医療大学公開講座，2012年10月8日，千葉県立保健医療大学幕張キャンパス（千葉県）.

■「認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム」

事業主：梶井 文子 開催日：8回／年 参加人数：36名

1. ミニレクチャー（30分）：認知症の理解（病気と症状）、認知症の人への接し方、在宅サービス・施設サービスの上手な活用の仕方を中心に行った。
2. リフレッシュ・プログラム：アートセラピー（ガラスのアクセサリづくり）、アロマテラピーハンドマッサージ、フットケア・マッサージ等
3. 話し合いのテーマ（1時間）：日頃の介護で困っていること、日常生活の介護の工夫、皆に活用してもらいたい情報等について話し合った。

参加家族は、認知症やケアに関する知識や情報を得ることや、他の家族・介護者と介護についての情報交換や気晴らしとなる活動に参加等を通じて参加満足度は平均 9.9 と非常に高かった。さらに時間外に個別の電話相談やファックスでの情報交換等も行った。本プログラムは、家族の精神的健康において重要であると考えた。

＜今年度研究業績＞

- ・梶井文子、山本由子、亀井智子. 認知症家族介護者プログラム参加者の在宅ケアとサービス利用に関する支援ニーズ. 第 16 回日本在宅ケア学会学術集会
- ・梶井文子、山本由子、亀井智子. 認知症高齢者の家族介護者のための看護支援プログラムとプログラム運営上の配慮. 日本地域看護学会第 15 回学術集会
- ・梶井文子、亀井智子、山本由子. 認知症者の家族介護者のためのリフレッシュ・プログラム参加前後の介護負担感・ストレス方略に関する行動の変化. 第 17 回征聖路加看護学会学術大会

■「在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング」

事業主：亀井 智子 開催日：継続的に提供 参加人数：0 名

2012 年度の新規利用者はありませんでした。

2011 年度までに本テレナーシングを慢性閉塞性肺疾患の患者計 21 名が利用しました。テレナーシングを利用した患者群は、利用しなかった同じ疾患の患者群（21 名）と比べて、費用対効果比、増分費用効果比はいずれも利用した群に高く、急性増悪発症率、急性増悪発症回数は利用した群に低く、利用した群に生活の質（QOL）の維持、うつの改善傾向、自己管理意識の向上傾向が認められました。このことから、一日 1 回、患者自身が心身の状態を自宅からテレナースに送信し、それを看護師が確認し、必要な対応を行うというテレナーシングは、病状変化の早期に対応できるため、急性増悪を発症することを減らし、そのため、生活の質を保つことができ、うつが改善する傾向や、自分自身で疾患を管理しているという実感を持つことにつながり、結果的に入院回数が少なくなるため、費用効果比が良いということがわかりました。

＜今年度研究業績＞

- ・Kamei T, Yamamoto Y, Kajii F, Nakayama Y, Kawakami C (2012). Systematic review and meta-analysis of studies involving telehome monitoring-based telenursing for patients with chronic obstructive pulmonary disease, Japan Journal of Nursing Science, DOI : 10.1111/j.1742-7924.2012.00228.x.
- ・亀井智子、山本由子、梶井文子、中山優季 (2012). 在宅酸素療法 COPD 患者へのテレナーシング実践による「セルフケアへの自信」の向上効果：ランダム化比較試験、第 32 回日本看護科学学会学術集会、東京都。
- ・亀井智子 (2012). 在宅酸素療法患者の在宅モニタリングに基づくテレナーシングの開発と効果、第 32 回医療情報学連合大会 [第 13 回日本医療情報学会学術大会] シンポジスト、新潟県。
- ・亀井智子、山本由子、梶井文子、中山優季 (2012). 慢性閉塞性肺疾患で在宅酸素療法を受ける患者へのテレナーシング実践のうつ改善の効果—ランダム化比較試験—、日本地域看護学会第 15 回学術集会、東京都。
- ・一般社団法人日本遠隔医療学会編集委員会監修；亀井智子他 (2013). 遠隔診療実践マニュアル、篠原出版新社、東京。
- ・亀井智子、山本由子、金盛琢也、亀井延明、中山優季、梶井文子 (2012). 聖路加看護大学亀井智子科研 SIG、エビデンスにもとづくテレナーシング実践ガイドライン 2012-2013、東京。
- ・亀井智子、山本由子、中山優季 (2012). 聖路加看護大学亀井智子科研 SIG、在宅療養者のためのテレナーシング実践ガイド 2012-2013、東京。

■「高齢者とご家族へオンリーワンの「^{メモリーブック}思い出帳」作りプロジェクト」

事業主：千吉良 綾子 開催日：毎月第 1、3 土曜日ほか対象者の都合により開催 参加人数：16 名

参加した認知症高齢者 2 名はいずれも 90 歳代の女性で、介護者は 60 歳代の娘であった。ライフレビューは毎回テーマを設け、1 組に 4 回、毎回約 60 分間行った。メモリーブックは介護者にテーマに添った写真を持参してもらい、概ね 12 ページ程度にまとめて作成した。対象者は、子どもの頃に姉妹と比べられた思い、家業や家族のために一生懸命だった日々、“何もできなくなった” 自分への思い等を語った。介護者からは、「(高齢者が) 生き生きと話せることに驚いた」、また「これまで知らなかった家の歴史や (親の) 様子がわかった」「生き方にこだわりを持つ

ていたとわかり、わだかまりが解けた」等の体験が語られた。1か月後にメモリーブックの使用について尋ねた結果「ベッドの脇に置いて毎晩見ている」「新たに思い出した出来事を載せて欲しいと言っている」「訪問看護師に見せ説明している」等、1人の際や他者との関係性において利用している様子が示された。

＜今年度研究業績＞

- ・山本由子、亀井智子（2013）．認知症高齢者のライフレビューに基づくメモリーブック作成とその利用による行動変化の検討．聖路加看護学会誌．16（3）．1-9.
- ・桑原良子、亀井智子（2013）．ライフレビューによる認知症高齢者の語りの内容分析 - 中等度認知症高齢者を対象とした1事例の実践報告から - ．聖路加看護学会誌．16（3）．10-17.

■「ダウン症候群のよりよい養育環境検討会 ー中央区ー」

事業主：有森 直子 開催日：9回／年 参加人数：146名（大人76名、こども70名）

2012年度は、「ダウン症候群の育成に関するプログラム」が発足して初年度の活動となり、9回企画を実施した。2010年大学の授業の一環として看護学生が中央区ダウン症候群親の会に参加し、2011年新たな試みとして看護学生と親たちが協働して療育プログラムの作成・実施・評価が行われてきた。よって活動としては3年目を迎えている。

テーマは5月「話し合い」、6月「からだの紙芝居・からだだから体操」、7月・11月「講師による体操」、9月「性教育講演会」、10月「音楽療法プログラム」、12月「日常生活動作」、1月「モンテッソーリ教育」、2月「コンサート」であり、2時間の会の中で前半に親子参加の活動、後半に親の話し合いを行った。9月、10月は看護学生による企画・実施となり、中央区ダウン症候群親の会とのパートナーシップの実践の場となり、親の会からも好評であった。

参加者のアンケートからは、毎回看護学生や医療・教育・音楽等の様々な専門家との関わりが親子にとって楽しみになっていたという肯定的評価が挙げられている。

今後は、親の会や子どもたちの託児を担うボランティアを育てていくこと、親の会との協働という観点からよりダウン症候群の子どもたちや親御さんの意見を取り入れるように検討していきたい。

活動内容：2013年3月21日聖路加看護大学主催 世界ダウン症の日記念講演会「ダウン症候群の方々のよりよい成育環境をみんなで考えよう！」開催

【市民健康講座】

■「家で死ねるまちづくり「はじめの一步の会」

事業主：山田 雅子 開催日：定例会1回／月 参加人数：137名 訪問件数58件（85名）

はじめの一步の会では一人暮らしあるいは日中独居となる高齢の方などへの訪問活動をボランティアとして行っている。会員であるケアマネジャーからの依頼を受け、散歩の付き添い、話し相手、図書館への同行、看取りのサポートなど相手のニーズに応じてさまざまな支援を行ってきた。

これからの人口の高齢化、特に中央区では長屋や高層マンションの単身世帯が増えていることを受け、住民同士でのネットワークの形成と、一人で生きていくことに必要な勉強会などを実施した。今年度研修では、「エンドオブライフケアについて（講師：千葉大学教授長江弘子さん）」を取り上げ、施設見学では会員である木村さんの勤務先湖聖会介護老人保健施設キーストーンに伺った。事例検討会は2回開催した。

本会の課題である多くの人に活動を知ってもらうことを目指し、利用者向けパンフレットの検討、中央区の子どもとためず環境まつりへの参加、「はじめの一步の会 第2回互いに語り合う会」開催など積極的に取り組んだ。

3月24日に実施した「第2回互いに語り合う会」は、重い身体障害を負いながら一人で生活されている当事者、中央区ボランティアセンターの職員、元行政担当者、多団体で活動している区民、介護経験を持つ区民などさまざまな立場の者が参加し、「一步の会」の活動について意見交換した。年老いて一人で生きていくための互いの助け合いの社会を気づいてくための方法論として、ボランティアのあり方を深く考えていくためのきっかけとなった。また、実際の訪問活動については、事務局体制のあり方についても問題提起がなされた。次年度以降の課題としたい。

■「自分の体を知ろう」おはなし会

事業主：菱沼 典子 開催日：11/18、11/25、12/9 参加人数：74名（33家族）

本年度始めてセンター事業として試みたが、9月に計画した本センターを会場としたお話し会は、参加者が得られなかった。一方杉並中央図書館と連携したお話し会は、3回連続出席可能な家族を対象としたが、広報されてすぐに定員をオーバーする状況であった。開催場所・開催時期・広報について、今後の課題となった。

お話し会は1回目消化器と骨・筋肉系、2回目が循環器系・生殖器系、3回目が泌尿器・神経系とし、各回、1つ目の紙芝居のあと臓器Tシャツ（1回目）、聴診器（2回目）、からだフシギの歌と踊り（3回目）を入れ、2つ目の紙芝居、質問受付、親から子への絵本「わたしのからだ」の読み聞かせを行った。毎回絵本は持ち帰って、最終回でセットになるよう配布した。最終回には催しへの意見を聞く時間を設け、またアンケート調査を実施した。また、記録、広報用に写真撮影を行った。

今回は初めて出会う人々の会であったが、子ども達は回を重ねるごとに慣れて親しくなり、図書館から体関連の絵本の紹介や教材の提供もあって、効果的にプログラムを運用できた。

親からの反応は、家では教えられないことが多く絵本は助かる、子どもたちの記憶に残っていて家でも話す、模型等の教材もあったらよい等の積極的な意見が得られた。

「わたしのからだ」をベースにした、子供向けのからだの絵本を作成する企画があり、お話し会に関係者が毎回出席して子どもの反応を見ることができた。その後絵本が完成し、出版された。

聖路加看護大学からだ教育研究会監修、ナムーラミチヨ作：「からだドクンドクン・・・」、赤ちゃんとママ社、2013.

■「聖路加市民アカデミー」

事業主：高橋 恵子 開催日：10/22 参加人数：344名

今年度の聖路加市民アカデミーは、「自分らしく生きるための心の準備」をメインテーマとし、少子高齢化進む時代に、私たちがよりよく生きるために、どのような心の準備をしたらよいのかを、参加者と一緒に考える機会を提供した。

プログラムの内容は、1) 日野原重明先生（聖路加看護学園名誉理事長、聖路加国際病院理事長）による特別メッセージ「自分らしい生き方」、2) 上野千鶴子先生（東京大学名誉教授）による「おひとりさまの最期」、3) さらに、渡辺峨山氏、中林万里子氏、江森正敏氏による尺八・ピアノ・ベースのコラボレーション演奏で幕を閉じた。会場は、定員の300名を超える344名が参加し大盛況であった。

参加者の背景は、女性が8割以上で、60代以上が7割以上を占めていた。また、参加者のアンケート結果からは、「パワーをもらった」「素晴らしかった」などと満足度も高く、次年度の継続の声が寄せられた。次年度も、市民の健康支援を目指した企画を検討していきたいと考えている。

<関連文献>

- ・高橋恵子、牛山真佐子、山田雅子（2012）. 2011年度聖路加・テルモ共同研究事業「新健康カレッジ」の活動報告－『聖路加市民アカデミー』と『カレッジセミナー』の実施状況と参加者の評価－, 聖路加看護大学紀要, 39, 81－86.

■「聖路加・テルモ新健康カレッジセミナー」

事業主：高橋 恵子 開催日：9/8,11/10,12/8,1/12 参加人数：168名

新健康カレッジセミナー2012では、メインテーマを「もっと知ろう、自分のからだ」と題して、一般市民が自分らしい生活を送るために、自分の健康状態を知り、付き合っていくこと身体を付き合い、今自分にできる健康生活を一緒に考える機会を提供した。カレッジセミナーは、[講座Ⅰ] 上村昭博先生（聖路加国際病院 放射線科医員）による「なぜなる脳出血?」、[講座Ⅱ] 亀井智子先生（聖路加看護大学 老年看護学教授）による「家の中で転倒?」[講座Ⅲ] 門伝昌己先生（聖路加国際病院 内分泌代謝科医長）による「ストレスや生活習慣による糖尿病」、[講座Ⅳ] 西裕太郎先生（聖路加国際病院 循環器内科医長）による「気をつけよう高血圧!」という内容で開催した。参加者の背景は、8割以上が女性で、9割以上が60代以上であった。参加者のアンケート結果では、今後も講座の継続

希望の声が多く寄せられ、来年度も市民の健康ニーズに沿った企画を検討していきたいと考えている。

<関連文献>

- ・高橋恵子, 牛山真佐子, 山田雅子 (2013). 2011 年度 聖路加・テルモ共同研究事業「新健康カレッジ」の活動報告—『聖路加市民アカデミー』と『カレッジセミナー』の実施状況と参加者評価, 聖路加看護大学紀要, 39, 81 - 86.

■「中央区民カレッジ まなびのコース」

事業主：山田 雅子 参加人数：255 名（前期 22 名×5 回、後期 29 名×5 回）

前期、後期ともに金曜日の 18 時 30 分～20 時に、看護実践開発研究センター「ぼるかルーム」および「交流ラウンジ」にて実施した。前期は「助け合い支えあって、よりよく生きる！」を、また後期は「自分の体を知って、健やかに生きる！」をテーマに、命を慈しみ互いに支えあって生きること、またヘルスプロモーションの考え方について学んだ。前期・後期をとおして“命の声をきく” ヨーガをそれぞれ 2 回行った。また前期では“かかりつけ看護師を持つ—まちのナースステーション”と題した講義で、病院の中や訪問看護ステーションだけでなく街の中で日常生活に根ざした看護師活動の実践の話聞いた。後期には“日本舞踊とむくみケア・エクササイズ”という軽い健康体操や、リンパマッサージの実習講座も取り入れた。なお前期・後期とも、5 回コースのうちの 1 回で、講義後に講師を交えた茶話会を開催し、参加者間での自由な意見交換や情報共有も行われた。各クラスの内容と講師は以下のとおりであった。

前期

6/1	地域に支えられて生きる—在宅医療の現場から	講師	廣岡佳代（聖路加看護大学）
6/15, 7/13	自分のからだを知ろう—命の声をきくヨーガ	講師	花村睦（ハタ・ヨーガ）
6/29	自分を愛し、人を愛す—	講師	島内憲夫（順天堂大学）
	のりっち、なおっちの健康講座		大久保菜穂子（順天堂大学）
7/27	かかりつけ看護師を持つ—	講師	福田裕子
	まちのナースステーション		（まちのナースステーション八千代）

後期

10/5, 11/2	自分のからだを知ろう—命の声をきくヨーガ	講師	花村睦（ハタ・ヨーガ）
10/19	日本舞踊とむくみケア・エクササイズ	講師	大木麻梨子（藤間流日本舞踊家）
11/16	リンパマッサージで足のむくみをとろう	講師	大畑美里（聖路加看護大学）
			本田晶子（聖路加看護大学）
6/29	命を慈しみ、支えあって生きる—	講師	島内憲夫（順天堂大学）
	のりっち、なおっちの健康講座		大久保菜穂子（順天堂大学）

■「中央区民カレッジ シニアコース」

事業主：山田 雅子： 参加人数：240 名（24 名×10 回）

10 月 5 日～12 月 21 日の期間の金曜日、午後 2 時～4 時に、「今考えよう、自分の最期の過ごし方」と題して 10 回のクラスを築地社会教育会館において実施した。本シニアコースはこれまで、高齢者の健康に関連する全般的な内容（感染症、排泄、スキンケア、介護、薬との付き合い方）を扱ってきたが、今年度は内容を一新し、自分らしい最期を迎えるための準備について受講生それぞれが考える機会を提供する内容とした。受講生からは、医療の現場を知り勉強になった、不安が軽減した、などの感想が寄せられた。各クラスの内容と講師は以下のとおりであった。

10/5	看取りの文化を考える	講師	山田雅子（聖路加看護大学）
10/12	治療終了の選択	講師	梅田恵（緩和ケアパートナーズ）
10/19	老いを考える	講師	桑田美代子（青梅慶友病院）
10/26	救急車で運ばれたら	講師	宇都宮明美（聖路加看護大学）
11/9	薬の使い方	講師	八重ゆかり（聖路加看護大学）
11/16	治療開始の選択	講師	梅田恵（緩和ケアパートナーズ）
11/30	在宅で看取るといこと	講師	佐藤直子（訪問看護ステーションあかし）
12/7	在宅医療に関連した社会資源	講師	田代真理（聖路加看護大学）
12/14	エンディングノート	講師	梅田恵（緩和ケアパートナーズ）
12/21	コースのまとめ	講師	梅田恵（緩和ケアパートナーズ）



キャリア開発支援部門



【ナーススキルアップ講座】

■「看護管理コンサルテーション」

事業主：井部 俊子 開催日：随時 参加人数：0名

聖路加看護大学「看護実践開発研究センター催しもの案内」や、2012年度認定看護管理者ファーストレベル講習の修了時および大学院のクラスなどにおいて、「看護管理コンサルテーション」の活用をPRしたが、今年度の来談者はなかった。

■「緩和ケアコンサルテーション」

事業主：林 直子 開催日：予約制 参加人数：0名

今年度の利用申し込みはなかった。今後も引き続き、がん緩和ケアに携わる看護者に本事業を活用してもらえるよう、広く参加を呼びかけ継続して取り組んでいく予定である。

■「在宅看護コンサルテーション」

事業主：山田 雅子 開催日：随時実施 参加人数：6件

センター事業のひとつである「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」に参加する予定の看護師が、事前の課題整理のために2名利用した。

その他3名も退院調整看護師としての経験が少なく、自施設で退院調整システムの構築に課題を感じている者であった。コンサルテーションを通して、自分の組織内での位置づけや役割の取り方について一定の方向性を見出すことができていたと考える。

また、今年度は介護保険施設の看護師から、施設内の他職種協働で行うケアの質向上に対してコンサルテーションの依頼があった。他職種で集まる機会を設け、現状認識や目標の共有、事例検討などを数回に渡って実施した。現状における課題について参加者が認識する機会となったと考える。

■「看護研究コンサルテーション」

事業主：松谷 美和子 開催日：9回／年 参加人数：9名

1. 看護大学のリプロダクティブ・ヘルス看護学専攻教員からの依頼を受け、卵子提供による不妊治療に関連した患者向けガイドライン作成について、ガイドラインの基本的知識（ガイドラインの種類とそれぞれの特徴など）およびガイドライン作成方法論等に関するコンサルテーションを行った。
2. 総合病院に勤務している看護師から依頼を受け、計画書作成から「その人らしさ」を尊重する熟練看護師の援助プロセスをテーマに、がん終末期ケアに焦点をあてて、論文作成に至るまでの過程での研究支援を行った。

■「語り合おう！看護マネジメント 看護管理者のための‘サポートグループ’」

事業主：井部 俊子 開催日：8/31、9/7、9/14、9/28 参加人数：のべ44名

毎回、日々の看護管理で困っていることや悩んでいることについて参加者の一人が相談するという形で始めた。参加者と主催者／運営関係者が、ディスカッションを通して状況に潜む看護管理の課題を明確にし、課題への対処方法について検討を行なった。

本事業は、認定看護管理者ファーストレベル講習会の開催期間に合わせ開催したことから、参加者はファーストレベル講習会の受講生であり、経験と理論を結びつけながら看護管理上の問題の検討を行なった。

事例の提供者からは、課題の解決が図れた、自己の看護管理者としての姿勢や価値観に気づかされたとの意見が聞かれたほか、参加者からも自己の組織における課題に置き換えて検討することができたとの声が寄せられた。

■「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」

事業主：山田 雅子 開催日：1コース（5回）／年 参加人数：のべ235名

高齢社会への対応として、在宅医療の促進は重要課題とされ、地域包括ケアの整備が推進されている。H24年度診療報酬改定では、効果的な退院調整を行うため、退院調整部門を強化し、早期の退院を評価するとして、退院調整

加算や地域連携計画加算などが新設された。しかし、未だ退院調整システム構築の十分なノウハウは、十分に浸透しているとは言えない。私たちは2008年度より、病院において退院調整を専任で行っている看護師を対象に、5回シリーズの参加型講習の本プログラムを行ってきた。今年で5年目となるが、今年も定員を上回る申し込みがあり、退院調整看護師支援に対するニーズの高さが伺えた。

今年受講者の平均退院調整経験年数は2.3年（4か月～6年）で、1年未満の者が10名であった。プログラムの内容としては、1日目は組織における退院調整システムの構築、2日目は自施設における物品の調達と診療報酬、3日目は合意形成を目指した多職種によるカンファレンスの運営方法、4日目は退院調整に関連する倫理的ジレンマ、5日目は地域完結型医療提供体制についてであった。各内容については事前課題を設け、予め受講者の施設における状況や課題を認識した上で、講義やグループワーク、ロールプレイを通して理解を深めてもらうようにした。最終日には47名全員が受講修了証を受け取り、自施設で取り組んでいくための課題と仲間を見つけることができた。終了後のアンケートでは、39名（82%）が研修に対して「大変満足している」、32名（68%）が研修は今後の退院調整活動に「大いに活かせる」と答えた。今後も、プログラムの継続と、研修生同士の交流をさらに深められるような取り組みを行っていききたい。

＜今年度研究業績＞

内田千佳子、山田雅子、廣岡佳代、他（2012）. 退院調整看護師の専門的役割開発プロセスについての研究、第17回聖路加看護学会学術大会、東京.

■「精神看護事例検討会」

事業主：萱間 真美 開催日：2回/年 参加人数：46名

精神科領域の疾患や状態にある人への看護師・保健師の関わり方について、実際の事例をもとに、話し、学びあい、支えあう場を作ることを目的とし、訪問看護師・保健師を対象とした事例検討会と、精神看護専門看護師を対象とした事例検討会を実施した。

訪問看護師が、精神疾患をもち地域で生活する人を支えていくなかで、利用者の病状が変化したり、支援の見通しが見えにくくなったりと、困難な状況に出会うことがある。そのような事例を通じ、支援者が話し合うことで、互いに支えあい、学びあうことができる。本年度は、訪問看護ステーション、病院の訪問看護師、精神保健福祉士、行政の保健師などの参加があり、活発な意見交換がおこなわれた。看護職が他職種どどのように協働していけばよいかという可能性についても話し合う機会となった。

専門看護師の場合も同様に、病棟看護師を含め様々な職種が対応に苦慮している患者に対し、直接的な支援と間接的な支援をどのように行えばよいかなどについて検討している。また、所属組織における専門看護師の役割開発について意見交換も行われた。これら検討を行うことで、同じ立場の専門看護師同士が共に考え、支えあうことのできる機会となっている。

いずれの事例検討会も来年度は回数を増やし、実施予定である。

■「がん看護事例検討会」

事業主：本田 晶子 開催日：3回/年 参加人数：1名

1回につき2時間、参加者が臨床で受け持っている複雑ながんに関連する健康問題をもつ事例を持ち寄り、事例の問題解決を図るためがん看護実践について、参加者とがん看護専門看護師であるファシリテーターがディスカッションを行った。

参加者は、がん看護専門看護師教育課程修了生であった。課程修了後の所属施設における自身の役割開発や、課程の中で学び得た知識や技術を、どのように臨床実践の中で発揮をしていくか、いかに専門職し、その取り組み方について情報共有を行った。

参加者は、事例検討会を通して、プレゼンテーションや意見交換するスキルを養うと共に、がん看護についての専門性を深めることができたという感想を話していた。参加者は、本検討会参加後、日本看護協会の専門看護師認定審査の合格を果たすことができた。

■「英文献を読もうパートⅠ」

事業主：園城寺 康子 開催日：前期 5 回、後期 5 回 参加人数：8 名

テキストは『看護英語読解 15 のポイント』メジカルビュー社とその CD を使用。各回 1Unit を選択し説明・解説し、Time や Asahi Weekly などから選んだ医療系教材も適宜使用した。特に基本的文法に留意した複雑な構文と正確な内容把握を中心に授業を展開した。今年度は英語の学習法に関する一般的質問もあったが、直読直解の方法や実践的学習方法も紹介でき、割合少人数だったので、個人的に訳読してもらい、訂正することができたのである。同時に「英文献を読もう！」パートⅡへの導入となるように配慮した。

今回は後期では iPS 細胞発見やノーベル賞関連の英文記事を読み、医療界での変化の兆しを紹介した。大学院試験などでは辞書持ち込み可能な場合もあるが、内容解読速度を上げるには医療系用語の習得は重要なので、今年度は特に強調して説明した。それは前期では遺伝子治療などを専攻したい受講者もあり、また、看護の世界でもグローバル化が進み、麻酔や災害看護の分野への関心も高かったからである。

また、受験志望者も参加しており、修士課程の試験問題の一般的傾向の分析やその対策なども加味した。受講者は専攻分野など様々であったが、基礎レベルは上がってきており、相互に刺激し合い非常に真剣に取り組んでいた。

■「英文献を読もうパートⅡ」

事業主：田代 順子 開催日：7/4～8/1、1/9～2/6 参加人数：8 名

2012 年は 7 月と 1 月～2 月の 2 回開講した。7 月開講は 5 名、1 月開講の受講者は 3 名、受講者は、大学院受験を予定している方 7 名、博士研究員 1 名であった。

第 1 回、第 2 回ともは全 5 回を終了した。受講者は、大学院受験予定者がほとんどであったので、受講態度は積極的であり、修了時は、全受講生とも、5 回受講した受講者は全員基礎力があり、3 回目ぐらいから、問題なく教材の英語を読むことができる力が付いたと評価している。第 1 回目の方々の合格の情報はないが、第 2 回目の受験の方は、それぞれの希望の大学院に合格した。

課題は、受講生数が予定参加人数の 4 割程度であることである。今年度の受講生の受講目的が入試準備等であった。この点は、受講生のニーズを満たしている。加えて、受講生の教材の Evidence-based practice に関する理解を深めることができたとの評価もあった。大学院入試対策のみでなく、より広く、EBN に興味を持ってもらうクラスにする必要がある。

■「不妊症看護認定看護師ポストコース」

事業主：森 明子 開催日：11/3 参加人数：48 名

今年度は「渡航不妊治療の現状と問題点」をテーマとした講演と、実際に渡航不妊治療を希望する患者へのケア経験を持つ不妊症看護認定看護師からの話題提供を受け、不妊症看護認定看護師として渡航不妊治療を希望する患者へのケア提供のあり方についてのグループディスカッションを持った。

昼食会では昨年度の参加後アンケートで挙げられていた意見を採用し、教育課程の修了年度ごとに自己紹介の時間を持った。これは修了年度を超えたつながりを広げる機会となり、特に各地域における連携を強めるきっかけになったと考えている。

参加後のアンケートでは、回答者数 41 名のほぼ全員が、講演、話題提供、グループディスカッションについて「とても良かった」「良かった」としており、講座の満足度を 10 点満点とした平均は 8.7 点であった。

全不妊症看護認定看護師 120 名中、本事業への参加者数は半数以下に留まった。その原因として、関連学会の前の週、連休初日の開催であったことが考えられる。次年度は参加者の利便性を考え、関連学会の前日に開催する予定である。今後も不妊症看護の発展を目指し、より良い講座のあり方を追求していきたい。

■「がん化学療法看護認定看護師スキルアップセミナー」

事業主：林 直子 開催日：11/10 参加人数：85 名

センター事業としては 2012 年度より新規に開始した事業であり、文部科学省がんプロフェッショナル養成基盤推進プランによる支援を受けて開催した。

主にがん化学療法看護認定看護師を対象に継続教育の場として、最新の治療の動向を学ぶとともに、セミナーを通して認定看護師間の交流を図ることを目的とした。今年度は、「がん化学療法の Up to date」と「Oncology Nsに必要な基礎知識」について聖路加国際病院の血液腫瘍科医師である森 慎一郎先生の講義と参加者による交流会の二部構成で行った。85名が参加し、アンケートの集計結果からも看護実践に活かせる内容であったと高評価であった。日々進歩するがん医療においては、新規抗がん剤や分子標的薬の開発など、より高度な実践力が求められることから、今後も継続的なフォローアップが重要であると考えられる。

■「訪問看護スキルアップセミナー」

事業主：山田 雅子 開催日：4回/年 参加人数：44名

訪問看護認定看護師に対し、継続教育の場を提供し、フォローアップしていくことを目的として開始し、今年で3年目となる。テーマは①5/26「褥創管理」、②9/8「緩和ケア」、③12/8「感染管理」、④3/23「家族看護」を取り上げた。毎回土曜日の13:30~16:30に、各自がテーマに合わせた実践事例を持ち寄り、事例検討を行った。参加者はリピーターが多く、①8名、②9名、③12名、④15名で、2010年度、2011年度に聖路加看護大学看護実践開発研究センター認定看護師教育課程を修了した者がほとんどであった。

終了後のアンケートでは90%以上がセミナーは有意義だった、今後の活動に活かせる内容であったと回答した。そして、「自らの看護を振り返る機会となった」「実習で学んだことを現在の実践では忘れていたように思う。今日、刺激をたくさん受けたので、明日より再実践していこうと思う」「講義形式の研修が多いので、現実の日々の業務での事例を検討し、第三者の意見を聞けることで大きな示唆をもらうことができる」「他者の事例を検討することも、自分の施設に置き換えて考えられて良かった」といった自由記載がみられた。本セミナーは認定看護師としてスキルアップのための教育の場となっているだけでなく、修了生同士の交流の場にもなっており、今後も継続する意味はあると感じている。また、参加者が固定化してきているため、周知手段を工夫して、参加者の拡大を図りたい。

■「実践・在宅ケア入門～すべての対象者に緩和ケアを～」

事業主：山田 雅子 開催日：2回/年 参加人数：21名

本事業は在宅での緩和ケアに興味・関心のある看護師を対象に、日ごろの看護技術の基礎を振り返り、日々の実践のスキルアップを図ることを目的に2011年度より開始し、2年目である。テーマは①5/12「疼痛マネジメント」、②9/15「ポジショニング」、③3/23「コミュニケーション」であった。参加者はすべて訪問看護に従事する看護師で、①12名、②9名、③0名（事前申込者が少なかったため開催中止）であった。前年度のリピーターや、参加者から紹介された者がほとんどであった。毎回土曜日の13:30~16:30の開催とし、基本的知識を伝えるための講義だけでなく、緩和ケアに関する仮想事例をもとにロールプレイを通して日頃のコミュニケーションを振り返ったり、ポジショニングではアーツルームでスライディングシートやリフトを実際に体験しながら、利用者のケア方法について考え、体験型の研修スタイルとした。

終了後のアンケートでは、「なかなか自分では勉強する時間が作れないので、新しい知識を得る機会になった」「実践にすぐに役立てられる内容だった」「講義だけでなく、ロールプレイやワークショップがあって楽しかった」「是非、他のステーションの人にもお伝えしたい」「以前、講義を受けて理解していたが忘れていたところも多く、さらに理解を深めることができた」といった感想があがっていた。

■「看護管理塾」

事業主：井部 俊子 開催日：6/9,12/1 参加人数：16名

- 参加者は、全16人が病院所属で、看護師長12人、主任4人であった。12人は認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程修了者であった。所属施設は神奈川県9人、東京都4人、埼玉県2人、山形県1人であった。
- テーブルを囲み自己紹介をしあって、和やかな雰囲気の中ですすめた。日々の看護管理実践をするなかで対応に苦慮し管理塾での検討を希望する参加者から、A4用紙1枚程度にまとめられた事例が事前提出された。これを素材に学習を進めた。提出された6事例は、すべてが人的資源管理に関連していた。

学習内容は以下のとおりである。1. 医療事故発生時・後の当事者の受苦体験の理解と看護管理者の対応の在り方。2. 無責任、協調性がないなど対応に苦慮するスタッフの理解と看護管理者として対応方法。3. 他課所属

の病棟クランク間の険悪な人間関係に、病棟看護師長はどう関与し対応するか。4. やりがいを持たないように感じるスタッフやチームに対して新任看護師長はどうかかわるか。5. 多忙なゆえにリリーフナースを依頼するが活用できない。効果的なリリーフシステムとは。

個々の事例に潜む看護管理の知とともに、参加者からは、体験した状況の看護管理的意味を理解することの大切さ、看護管理者としての構えとそこから導き出される一つひとつの判断・行為の重要性、リフレクションから得られる気づきの重要性などの学びが語られた。

■「ELNEC-J 聖路加～全てのナースのためのエンド・オブ・ライフ・ケア～」

事業主：山田 雅子 開催日：8/31・9/1、3/9・3/16 参加人数：87名（のべ174名）

ELNEC-Jのプログラムに従って、エンド・オブ・ライフ・ケアを系統的に学び、これからの高齢多死社会に向けて重要となってくる看護師のエンド・オブ・ライフ・ケアの充実を図るために、今年度より開始した。受講者にとって参加しやすい開催日程とするため、金・土曜連日2日間コース、隔週土曜2日間コースを設定した。参加者は①8/31・9/1は38名、②3/9・3/16は49名、看護師経験年数は①14.1年、②15.8年であった。参加者の中には緩和ケアや訪問看護等の認定看護師も10名程度みられた。また、全国から参加者がいたため、17:00にはELNEC-J教育プログラムの10のモジュールを2日間で終わらせるようスケジュールを立てた。痛みや症状マネジメント、コミュニケーションのモジュールではより理解を深められるよう、講義の他に、グループでのケーススタディやロールプレイの時間を設けた。また、詰め込み式の講義で、受講者が受身的にならないように、各モジュールの講義では隣や前後の受講者とディスカッションする機会を設けたり、動画等の補助教材を効果的に使用した。

②コースで1名体調不良で退席した者がいたため、修了証は86名への発行となったが、終了後の全体アンケートでは、ほぼ全員が本プログラムの内容に「大変満足した」「満足した」と回答していた。また、「たくさんの内容で頭がパンクしそうだったが、楽しく勉強することができた」「ワークが多く、多くの方と話せてよかった」「自身の看護を振り返る機会となった」といった自由記述がみられた。次年度も、介護保険施設で働く看護職への情報提供も含めて、広く参加者を募り、継続していきたいと考える。

■「文献検索～準備体操」

事業主：中山 和弘 開催日：3回/年 参加人数：24名

看護文献を探すコツについてご紹介、医中誌 web、PubMed という2つのデータベースの基本的操作について実習しました。

参加者は久しぶりに文献検索をするかたから、丁度、文献検討を行っていて上手く検索ができずに困っているかたまで様々でした。

講座に先だって、ウェブ上で医中誌 web が上手く検索できなかつた事例を示し、どうしたら上手くいくかを考えてくる課題を出し、講座でご紹介する文献検索のコツの理解を深めることを狙いました。

講座内容は、2つのデータベースの基本操作方法、データベースの選び方、上手く検索できない場合にどうしたらよいのか、キーワードの探し方、データベースに適した検索方法、文献を探すコツ等でした。

1人1台のパソコンを用意して、画面を操作しながら課題を解いたり、データベース操作を実習しました。入学前の開催は適切とのご意見をいただいておりますので、来年度も同時期に開催を予定しています。

■「クリティカルケア・シミュレーション教育プログラム SCC セミナー」

事業主：宇都宮 明美 開催日：13回/年 参加人数：96名

I 運営

聖路加看護大学とパラマウントベッド株式会社との共同事業として運営している。

II プログラム

1. プログラムの特徴

シミュレーションを通じて臨床に必要な理論と技術を、実践学習することを目的とし、最初にベーシックレベルを対象とした3プログラム（循環管理、呼吸管理、人工呼吸器装着患者の呼吸管理）を開催している。各プログラム

共通の特徴は、ポジティブフィードバックを行うことをコンセプトとしたインストラクションと、振り返りと実践を繰り返すことによる技術の向上促進である。プログラム開催時の構成は、受講者 6 人～ 12 人に対し、講師 2 名インストラクター 2 名としている。

2. プログラム開発

今後、エキスパートレベルに応じた 2 プログラムと口腔ケアに関する 1 プログラムを順次開催する予定である。

Ⅲ 受講者の状況

現在全ての 3 プログラムを受講した者が 2 名、2 プログラムを受講した者が 6 名であるが、受講者アンケートには、全員が他のコースの受講を希望していることが示されている。また 10 段階評価で平均 8 点の評価が得られている。

Ⅳ 今後の課題

今後は、開発中のプログラムの開催と、受講者人数増員につながるコース運営を課題としている。

【認定看護管理者講習・認定看護師教育課程】

■「認定看護管理者ファーストレベル講習」

事業主：井部 俊子 開催日：2012 年 8 月 20 日～ 9 月 21 日 参加人数：93 名

ファーストレベル講習には 97 名の出願者があり 96 名を合格とした後、3 名の辞退者があり 93 名が受講した。出願者の年齢は 20 代 2 名、30 代 39 名、40 代 54 名、50 代 5 名、また、看護師長、主任または師長・主任相当の職位が約 40 名であった。地域別でみると、東京都 41 名、神奈川県 28 名であり関東地域が大半であった。

科目構成は、看護管理概説、看護情報論、グループマネジメント、看護専門職論、ヘルスケア提供システム論、看護サービス提供論の 6 科目である。本講習では、各領域の専門家による講義に加え、演習として TBL (Team Based Learning) での学習形態も取り入れ、受講生の積極的参加とともに、論理的思考力、対人関係能力、記述・発表能力の向上につなげている。また今年度は 1 科目を除いて科目評価をレポートから試験に変更することにより、コース終了後の受講生の負担を軽減した。

受講生によるプログラム評価では、講義内容、講師、講義資料については、いずれの科目でも約 90%を超える受講生が「適切だった」または「どちらかといえば適切だった」と評価した。またグループ学習、TBL での演習についても「効果的だった」、「どちらかといえば効果的だった」の評価を合わせて約 90%であった。

なお本講習は、日本看護協会認定看護管理者制度 ファーストレベル講習の教育機関として認定を受け、実施している。

■「認定看護師教育課程（不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース）」

事業主：山田 雅子 開催日：2012 年 6 月～ 2013 年 2 月 参加人数：52 名

認定看護師とは、複雑・多様化する社会や医療状況の中で、患者の健康問題を多角的に捉える視点を持ち、特定の分野において質の高い医療サービスを提供することができる看護師である。本学では、①不妊症看護・②がん化学療法看護・③訪問看護の 3 つの特定分野における認定看護師教育を行い 5 年が経過した。本学のコース修了者が講師となって後輩の教育に当たり、実習施設での指導者となるなど、5 年間の人材が積み重なり、本学における認定看護師教育の厚みが出てきたと考える。

2012 年度の入学者数は① 9 名 (定員 15 名)、② 27 名 (定員 30 名)、③ 16 名 (定員 30 名) であり、各コースとも定員に満たない状況が続いている。引き続き広報に努力することと聖路加看護大学における認定看護師教育課程のあり方について検討を要する。

<今年度研究業績>

田代真理、佐藤直子、山田雅子、福田裕子 (2012). 訪問看護認定看護師教育課程における研修生の自己評価の変化、第 17 回聖路加看護学会学術大会、東京。

■「研究相談」

担当：八重 ゆかり 開催日：予約制（木曜日午後） 参加人数：延べ 20 名

研究センターにおける研究活動支援部門の業務として、2010 年度より本学研究者を対象とした研究相談を開始し、今年度は 3 年目にあたる。2012 年 4 月から 2013 年 3 月までの 1 年間における相談者数は 19 人（教員 2 人、博士課程学生 5 人、修士課程学生 12 人；のべ相談回数 37 回）、相談総時間数は 74 時間であり、1 ヶ月あたりの平均相談回数 3.1 回、平均相談時間 6.2 時間という実績であった。昨年度（相談者数 14 人、のべ相談回数 33 回、1 ヶ月あたりの平均相談回数 3.3 回、平均相談時間 6.3 時間）とほぼ同程度の実績となった。相談内容については、研究計画段階における研究デザインに関する相談よりも、結果の解析方法に関する相談のほうが多い傾向にあり、この傾向も昨年と同様であった。

なお今年度は、「臨床疫学研究入門」のナーススキルアップ講座を開講し、また本学大学院生の有志グループとともに Journal Club を 6 回開催した。来年度は研究相談業務とともに、これら「臨床疫学研究入門」および Journal Club を継続し、計画段階における研究デザイン検討と解析計画の重要性の理解と周知に努めたいと考えている。

■「臨床疫学研究入門」

担当：八重 ゆかり 開催日：5 回／年 参加人数：延べ 102 名

本講座は、ランダム化比較試験などの臨床疫学研究デザインの知識を身につけることにより、量的研究の研究計画において適切な研究デザインを選択し、また各研究デザインごとの具体的研究方法を検討できるようになることを目指して、以下の内容を 5 回の講義シリーズとして実施した。

- 第 1 回 Introduction to Clinical Epidemiology (EBM)
- 第 2 回 臨床統計をかじってみる（パラメトリック検定について）
- 第 3 回 ランダム化試験の計画書を読む
- 第 4 回 ランダム化試験を読む その 1
- 第 5 回 ランダム化試験を読む その 2

本講座では、第 3 回にランダム化試験のプロトコル（試験計画書）の実例を読むという内容を取り入れることにより、臨床疫学研究デザインの知識を身につけるだけでなく、研究者としての実践（研究計画書の作成）により役立つコース内容とした。来年度は、ランダム化試験のほかに観察研究としてのコホート研究、ケース・コントロール研究デザインに関する内容も盛り込む予定である。

2012年度 学生の実習および研究・研修の場としてのセンター事業等活用状況

活用したセンター事業等	担当者	学生種別と学年	科目名または研修名	利用者数
るかなび	大橋久美子	学部1年生 学士編入16回生	PCC概論	96名
	大橋久美子	学部1年生	PCC概論 (コミュニケーション実習)	1名
	山田雅子 田代真理 佐藤直子	認定看護師教育課程 研修生 (訪問看護コース)	臨地実習	16名
	山田雅子 田代真理 佐藤直子	認定看護師教育課程 研修生 (訪問看護コース)	総合実習	16名
闘病記文庫	大橋久美子	学部1年生 学士編入16回生	PCC概論	不明
赤ちゃんがやってくる	片岡弥恵子	修士2年生	コミュニティ論演習	18名
リンパ浮腫ケアステーション	大畑美里	修士課程がん看護・緩和ケア 上級実践コース1年生	がん看護学・緩和ケア特論Ⅱ	1名
天使の保護者ルカの会	蛭田明子	学部4年生	家族発達看護論Ⅱ	2名
	蛭田明子	病院勤務の助産師	ペリネイタルロス看護師 教育プログラム	4名
多世代交流型 デイプログラム 聖路加 和みの会	亀井智子	看護学部	韓国ヨONSEI大学短期交換研修 プログラム	4名
語り合おう！看護マネジメント	井部俊子 吉田千文 中村綾子 倉岡有美子	認定看護管理者 ファーストレベル講習受講生他		44名
看護管理塾	井部俊子 吉田千文 山田雅子 中村綾子 倉岡有美子	認定看護管理者 ファーストレベル講習受講生		25名

2012年度 看護実践開発研究センター 運営委員会・専任研究員・研究支援室スタッフ

■運営委員会

センター長	教授	山田雅子
研究科長・学部長・WHOコラボレーティングセンター長	教授	菱沼典子
PCC実践開発部門長・開発担当	教授	亀井智子
PCC実践開発部門 開発担当	准教授	高橋恵子
PCC実践開発部門 政策担当	教授	山田雅子
PCC実践開発部門 国際担当	教授	田代順子
キャリア開発支援部門長	教授	森明子
キャリア開発部門 教育研修担当	教授	山田雅子
専任研究員・研究活動支援部門長	准教授	有森直子
専任研究員・研究活動支援部門 研究支援担当	助教	八重ゆかり
専任研究員	助教	實崎美奈
専任研究員	助教	田代真理
専任研究員	助教	本田晶子
専任研究員	助教	大畑美里

■専任研究員

教授	山田雅子
准教授	有森直子
准教授	高橋恵子
助教	實崎美奈
助教	八重ゆかり
助教	田代真理
助教	本田晶子
助教	大畑美里

■研究支援室スタッフ

課長	高木裕也
係長	平良智子
広報室係長兼務	福田昌
	田口瞳
	中山令子(派遣)



St. Luke's College of Nursing
Research Center for
Development of
Nursing Practice

2012 年度聖路加看護大学 看護実践開発研究センター報告書

2013 年 5 月 28 日発行

発行者：聖路加看護大学看護実践開発研究センター

発行所：瀬味証券印刷株式会社